

合同キャンプにおける自己概念の変化

奥山 洸¹・諫山 邦子²・加藤 敏之¹

¹北海道教育大学釧路校学校教育講座教育心理学

²北海道教育大学釧路校学校教育講座幼児教育

The changes in self-concept of participants in a joint camp

Kiyoshi OKUYAMA, Kuniko ISAYAMA and Toshiyuki KATO

Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

Summary

The purpose of this study was to examine the changes in self-concept of participants in a joint camp. The subjects were 63 junior high and high school students from 7 regions, who participated in a 3-day joint camp conducted in January 2001 at the Prefectural Youth Center in Fukagawa City.

To measure the students' self-concept, the 17 self-concept scale was administered before and after the camp. Impressions of the 5 sub programs conducted at the camp, were measured on a scale of one-3 (one=poor 3=good) by the participants.

The following results were obtained:

1. 10 out of 17 self-concept scales by junior high school students, and 5 out of 17 self-concept scales by high school students changed significantly in a positive direction before and after the camp.
2. Some significant differences were found in the measurements of impressions of the sub-programs between junior high and high school students, and also males and females.

1. 問題

われわれは 1997 年以来、道東の野外をフィールドとする体験学習のプログラム作成と実行に参加し、あるいは協力してきた。またこれらのプログラムが参加者に与える効果についても調査してきた。その際、使用したのが梶田ら⁽¹⁾に依拠して独自に作成した自己概念調査票である。当初の調査票は 29 項目からなるもので、これを用いて行った調査のいくつかはすでに報告しており⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾、全体の展望も行っている⁽⁵⁾。その中で、この種のプログラムはそれが長期であるほど、また冒険的要素が強いほど、多くの項目で肯定的な変化が生じるという、飯田ら⁽⁶⁾の結果を確認している。その後、われわれは調査票の改訂を行い、変化しにくい項目を除いて、環境教育に関する項目を加えるなどして最終的には 29 項目を 17 項目に減らした。また、これまで 5 件法であった回答の形式を 6 件法に改めた。この新しい調査票を用いて、1999 年 10 月の長期宿泊型冒険教育プログラム(以下「1999 年 10 月キャンプ」)に参加した不登校中学生について、17 項目中 11 項目でキャンプの事前と事後の間の有意差ないし有意傾向を確認している⁽⁷⁾。

今回報告するのは、2001 年に 2 泊 3 日の日程で行われたキャンプ(資料参照)についての調査結果である。このキャンプには、北空知 1 市 6 町の中学校 10 校、高校 4 校から 63 名の中・高校生が参加した。これを、例えば参加者 18 名中 17 名が単一の適応指導学級に所属していた 1999 年 10 月キャンプに比べると、参加者がお互いに顔見知りである程度は低い。1999 年 10 月キャンプの参加者は不登校中学生であるが、このキャンプの参加者は一般の中・高校生である。1999 年 10 月キャンプが自己概念の変化しやすいとされる長期宿泊型の冒険教育プログラムを内容としていたのに対して、このキャンプは短期宿泊型で内容も屋内の活動を中心としている。

このようなプログラムが自己概念の変化という点でどのような効果をもつのかを見るのが、本研究の主な目的である。

2. 方法

2.1. 調査対象者

深川市からは中学校 4 校、高校 1 校の生徒がキャンプに参加した。深川市以外は町毎に中学校 1 校、または中学校 1 校

と高校1校の生徒が参加した。1校あたり参加者は、中学校の場合2名から9名、高校の場合3名から6名の範囲であった。キャンプに参加したこれらの中・高校生全員を調査対象者とした。市町別の調査対象者を表1に示す。

表1 調査対象者

	中学生			高校生			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
深川市	5	7	12	4	2	6	9	9	18
雨竜町	4	0	4	0	0	0	4	0	4
幌加内町	2	2	4	2	2	4	4	4	8
北竜町	6	2	8	0	0	0	6	2	8
秩父別町	7	0	7	0	0	0	7	0	7
沼田町	4	5	9	2	1	3	6	6	12
妹背牛町	0	2	2	2	2	4	2	4	6
合計	28	18	46	10	7	17	38	25	63

2.2.プログラム

2.2.1.概要 2001年1月10日から12日まで2泊3日の日程で深川市の北海道立青年の家を会場として行われた。63名の参加者は8班に分けられ、キャンプ中の行動の多くは班単位で行った。各班は2名の高校生と4名ないし7名の中学生からなり、これらの班員は出身地域(学校)が原則として全て異なるように構成された。また班毎に教員2名ないし3名、計19

名を助言者として配置した。これらの教員のうち5名は外国人のAET(英語指導助手)であった。プログラムの概要を表2-1から表2-3に示す。

2.2.2.個別プログラム プログラムは、1)交流交歓会(以下「交歓会」)、2)国際交流、3)雪合戦、4)討論会、および5)ドミノという5個の主要な個別プログラムを含んでいた。

交歓会 地域別に14の班に分かれて、それぞれの地域の紹介を行った。班毎に模造紙1枚を素材として絵や文字による表現を工夫した。発表の準備に30分、発表は班毎に5分の時程であった。発表の後、ビンゴゲームを行い、さらに交流を図った。なお、この個別プログラムに限り、妹背牛町の中・高校生が事前に企画したものであった。

国際交流 AETが中心となり、以下の3種類のゲームを行った。宝探しゲーム:施設内の各所にあらかじめ隠しておいた10枚の単語カードを班毎に探し出した。全てが集まると1つの文章が完成された。クリケット:野球に似たイギリスのゲームを屋内で行った。サッカー:ミニバレーボールを用い、屋内で行った。

雪合戦 午前と午後に分けて行い、午前中は班毎に各1流の旗の製作と会場の設営をした。午後は班対抗のトーナメント形式で競技をした。競技はボックス、フォアードの役割分担などの細則はあるが、基本的には班毎に作った90個の雪玉を相手チーム全員に当てる、もしくは相手チームの旗を倒すことを

表2-1 日程(第1日目:01年1月10日)

時間	日程	会場	内容	担当
13:00	受付	正面玄関	挨拶	妹背牛町
13:30	開会式	多目的ホール	主催者挨拶・歓迎の挨拶など	妹背牛町
14:00	オリエンテーション 写真撮影	多目的ホール	施設利用の注意事項 ・研修会の概要・班編成・役割分担	妹背牛町
14:30	移動・休憩・準備	多目的ホール・部屋	部屋への荷物移動	妹背牛町
15:00	交流交換会	多目的ホール	ゲーム ・自分の町の紹介	妹背牛町
17:30	夕食	食堂	食事	班長
18:00	休憩	館内・部屋	英会話の準備など	各自
18:30	国際交流	多目的ホール	ゲーム・ダンス ・歌など	幌加内町
20:30	自由時間・入浴	館内・浴室		各自
22:00	班長会議	小研修室	反省と連絡事項	妹背牛町
22:30	班会議・部屋会議	多目的ホール・部屋	反省と連絡事項	班長
23:00	消灯・就寝	各部屋		部屋長

注:ゴシックは主要な個別プログラム

表 2-2 日程 (第 2 日目: '01 年 1 月 11 日)

時間	日程	会場	内容	担当
7:00	起床・清掃	各部屋		部屋長
7:45	朝食	食堂	食事	班長
8:45	朝のつどい	多目的ホール	挨拶	青年の家
9:00	雪合戦準備	館外テニスコート ・多目的ホール	会場設営 (館外テニスコート) ・旗作成 (多目的ホール)	北竜町 秩父別町
12:00	昼食	食堂	食事	班長
12:30	休憩	館内	雪合戦の準備	各自
13:00	雪合戦	館外テニスコート ・多目的ホール	各班対抗戦	北竜町 秩父別町
16:30	入浴	浴室	体を温める	各自
17:30	夕食	食堂	食事	班長
18:00	討論会の準備	多目的ホール	頭の整理	深川市
19:00	討論会	多目的ホール	自分の考えを発表する	深川市
21:30	班長会議	小研修室	反省と連絡事項	妹背牛町
22:00	班会議・部屋会議	多目的ホール・部屋	反省と連絡事項	
23:00	消灯・就寝	各部屋		部屋長

注:ゴシックは主要な個別プログラム

表 2-3 日程 (第 3 日目: '01 年 1 月 12 日)

時間	日程	会場	内容	担当
7:00	起床・清掃	各部屋		部屋長
7:45	朝食	食堂	食事	班長
8:45	朝のつどい	多目的ホール	挨拶	青年の家
9:00	部屋点検	各部屋	各部屋の点検	部屋長
9:30	ドミノ	多目的ホール	ドミノ倒し作業	沼田町
12:00	昼食	食堂	食事	班長
12:30	ドミノ	多目的ホール	ドミノ倒し作業・コンセプト発表 ・ドミノ倒し	沼田町
13:30	閉会式	大研修室	修了証授与・主催者挨拶 ・お別れの言葉	妹背牛町
14:00	解散			

注:ゴシックは主要な個別プログラム

目的として行われた。なお、5 個の個別プログラムの中で、この雪合戦のみが屋外を会場としたものであった。

討論会 「もう一度生まれ変われるなら男がいい」、「私はふるさとで暮らしたい」、「食べるならすしよりも焼き肉だ」、および「冬は雪のない方がいい」というそれぞれのテーマについて、賛否いずれかの立場で班対抗のディベートを行った。1 回の

ディベートは賛否両方の立論、作戦タイム、賛否両方からの質問、作戦タイム、賛否両方への返答から構成され、審判の判定により勝敗を決めた。

ドミノ 各班毎におよそ 3000 個のドミノ牌を用いて、自分達で作図した模様の形に並べ、これらを結んで 1 つの模様にした。それぞれの作品のコンセプトについて発表会を行った後、こ

表 3-1 自己概念の変化（中学生）N=43

	事前	事後	検定結果
	Mean(S. D)	Mean(S. D)	
1 自分に自信をもっている。	2.70(1.19)	3.40(1.24)	t(42)= 4.63**
2 自分は、いろいろな人達に支えられて生きていると思う。	4.91(0.92)	5.12(1.05)	
3 友達の考えを、よく聞くほうである。	4.17(1.29)	4.69(1.07)	t(41)= 3.00**
4 自然の大切さについて、よく考えている。	3.29(1.35)	3.83(1.28)	t(40)= 2.80*
5 自分のことについて、深く考えることがある。	3.95(1.46)	4.14(1.67)	
6 人よりおとっていると、感じることもある。	3.69(1.39)	4.00(1.25)	t(41)= 1.80 ⁺
7 困っている友達を、助けるほうである。	4.10(1.14)	4.50(1.04)	t(41)= 2.20*
8 自分は、自然と一緒に生きていると思う。	3.26(1.27)	3.90(1.48)	t(41)= 2.79**
9 人の役にたつことをしたいと思っている。	4.07(1.10)	4.70(1.21)	t(42)= 3.44**
10 がんばれば、できないこともできるようになると思う。	4.91(1.09)	5.07(1.01)	
11 何にでも、興味を示すことが多い。	4.79(1.19)	4.72(1.18)	
12 一人でも、生きていけると思う。	2.40(1.47)	2.14(1.51)	
13 考えるより、まず行動するほうである。	3.56(1.18)	4.09(1.23)	t(42)= 4.10**
14 自分は、世の中のために生まれたと思っている。	2.58(1.44)	2.91(1.44)	t(42)= 1.68 ⁺
15 人より、すぐれていると思う。	2.58(1.42)	2.79(1.21)	
16 自分自身から、目をそらしたり、逃げてはいけないと思う。	4.44(1.16)	4.60(1.37)	
17 自然を守るために、何かしたいと思う。	3.67(1.48)	4.21(1.58)	t(42)= 2.44*

注: *p<.10 **p<.05 ***p<.01

注: 「あてはまらない」に1点を与え、以下「あてはまる」に6点を与えるまで1点刻みに得点化し、平均と標準偏差を求めた。

れらを一挙に倒した。

2.3. 調査票および調査手続き

自己概念の変化を見るために自己概念調査票を用いた。調査票は17の短文のそれぞれについて、「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「ややあてはまらない」、「ややあてはまる」、「かなりあてはまる」、および「あてはまる」の6件のいずれかを選ばせるという形式であった。評定はキャンプ開始の当日と終了の当日の2回行った。

また、これとは別に終了の当日、15項目からなるアンケート調査を行った。本論ではこのうちの5項目を分析の対象とする。これらは5個の主要な個別プログラムのそれぞれについて、例えば「交換交流会はどうでしたか」と訊き、「良かった」、「ふつう」、および「良くなかった」のいずれかを選ばせるものであった。

3. 結果

3.1. 自己概念の変化

「あてはまらない」に1点を与え、以下「あてはまる」に6点を与えるまで1点刻みに得点化し、事前と事後の平均値を比較した。中学生についての結果を表3-1に、また高校生についての結果を表3-2に示す。

中学生では、17項目中10項目で有意差、ないし有意傾向が見られた。「1 自分に自信をもっている」、および「13 考えるより、まず行動するほうである」が有意な正の変化を示した。「6 人よりおとっていると、感じることもある」も有意傾向ではあるが正の変化を示したので解釈は難しいが、他者のすぐれていることを認めながらも積極的に行動する、という肯定的な変化が生じたということではないだろうか。「3 友達の考えを、よく聞くほうである」、「7 困っている友達を、助けるほうである」、および「9 人の役にたつことをしたいと思っている」で有意な正の

表 3-2 自己概念の変化 (高校生) N=17

	事前	事後	検定結果
	Mean(S. D)	Mean(S. D)	
1 自分に自信をもっている。	3.18(1.43)	3.53(1.70)	
2 自分は、いろいろな人達に支えられて生きていると思う。	4.94(1.14)	5.24(0.97)	t(16) = 2.06 ⁺
3 友達の考えを、よく聞くほうである。	4.18(1.38)	4.94(0.97)	t(16) = 3.25 ^{**}
4 自然の大切さについて、よく考えている。	4.00(1.37)	4.24(1.03)	
5 自分のことについて、深く考えることがある。	3.82(1.63)	4.71(1.40)	t(16) = 2.76 [*]
6 人よりおとっていると、感じることもある。	4.53(1.59)	4.24(1.72)	
7 困っている友達を、助けるほうである。	4.65(1.37)	5.00(0.94)	
8 自分は、自然と一緒に生きていると思う。	4.12(1.54)	4.65(1.50)	
9 人の役にたつことをしたいと思っている。	4.41(1.42)	4.94(1.20)	
10 がんばれば、できないこともできるようになると思う。	4.59(1.58)	4.59(1.81)	
11 何にでも、興味を示すことが多い。	5.24(1.09)	5.53(0.80)	t(16) = 2.06 ⁺
12 一人でも、生きていけると思う。	2.71(1.83)	2.41(2.00)	
13 考えるより、まず行動するほうである。	4.06(1.52)	4.47(1.55)	
14 自分は、世の中のために生まれたと思っている。	3.12(1.41)	2.82(1.59)	
15 人より、すぐれていると思う。	2.35(1.73)	2.35(1.66)	
16 自分自身から、目をそらしたり、逃げたいいけないと思う。	4.76(1.09)	5.41(0.80)	t(16) = 3.39 ^{**}
17 自然を守るために、何かしたいと思う。	4.47(1.46)	4.41(1.50)	

注: ⁺p<.10 ^{*}p<.05 ^{**}p<.01

注: 「あてはまらない」に1点を与え、以下「あてはまる」に6点を与えるまで1点刻みに得点化し、平均と標準偏差を求めた。

変化を示した。「14 自分は、世の中のために生まれたと思っている」も有意傾向ではあるが正の変化を示した。他者との関係にかかわる自己概念に肯定的な変化が生じたと言える。「8 自分は、自然と一緒に生きていると思う」、「4 自然の大切さについて、よく考えている」、および「17 自然を守るために、何かしたいと思う」という自然をキーワードとして含む3項目全てで有意な正の変化を示した。自然とかかわる自己概念で肯定的な変化が生じたと言える。プログラム中の自然に触れる要素は、施設敷地内の雪合戦のみであることを考えると、この結果は興味深い解釈は難しいだろう。

高校生では、17項目中5項目で有意差、ないし有意傾向が見られた。「3 友達の考えを、よく聞くほうである」で有意な正の変化が見られた。「2 自分は、いろいろな人達に支えられて生きていると思う」の正の変化は有意傾向であった。他者との関係にかかわる自己概念に肯定的な変化が生じたことが示唆される。「11 何にでも、興味を示すことが多い」で有意傾向ではあるが正の変化が見られた。積極的な意欲という点での肯定的な変化が示唆される。「5 自分のことについて、深く考え

ることがある」、および「16 自分自身から、目をそらしたり、逃げたいいけないと思う」で有意な正の変化が見られた。自己への省察にかかわる自己概念で肯定的な変化が生じたと言える。

以上要するに、中学生では、他者や自然への行動的かわりという能動的な側面での変化、高校生では他者への受動的かわり、もしくは自己への省察という静止的な側面での変化が示唆されている。

3.2.個別プログラムの評価

5個の個別プログラムそれぞれへの評価で、「良かった」に3点、「ふつう」に2点、「良くなかった」に1点を与え、校種(2)×性別(2)×プログラムの種類(5)の分散分析を行った。その結果、校種×プログラムの種類(F(4,176)=3.44,p<.05)、および性別×プログラムの種類(F(4,176)=5.13,p<.01)の交互作用がそれぞれ有意であった。校種間の差についての単純主効果を分析した結果を表4-1a、表4-1b、および表4-1cに示す。同様に性差についての結果を表4-2a、表4-2b、および表4-2c

表 4-1a 個別プログラムの評価 (校種間の差)

	中学生	高校生	校種間の 差
	(N=34)	(N=14)	
	Mean (SD)	Mean (SD)	
a. 交歓会	2.09 (0.62)	2.71 (0.47)	F(1, 44)=9.94**
b. 国際交流	2.47 (0.66)	2.21 (0.89)	
c. 雪合戦	2.32 (0.73)	2.14 (0.86)	
d. 討論会	2.12 (0.77)	2.57 (0.65)	F(1, 44)=3.66*
e. ドミノ	2.65 (0.49)	2.71 (0.61)	

注: *p<.10 **p<.01

表 4-1b 個別プログラムの評価 (多重比較:中学生)

	Mean	d. c. b. e.
a. 交歓会	2.09	= = < <
d. 討論会	2.12	= < <
c. 雪合戦	2.32	= <
b. 国際交流	2.47	=
e. ドミノ	2.65	

注: 不等号は上端の記号で示す項が左端の項より有意に大であることを示す (Mse=0.371, p<.05).

表 4-1c 個別プログラムの評価 (多重比較:高校生)

	Mean	b. d. e. a.
c. 雪合戦	2.14	= < < <
b. 国際交流	2.21	= < <
d. 討論会	2.57	= =
e. ドミノ	2.71	=
a. 交歓会	2.71	

注: 不等号は上端の記号で示す項が左端の項より有意に大であることを示す (Mse=0.371, p<.05).

に示す。

校種間の差では交歓会、および討論会に対する評価が、中学生よりも高校生で有意に高かった。多重比較の結果でも、中学生は交歓会と討論会を5個の個別プログラムの中で相対的に低く評価し、高校生は相対的に高く評価していた。ドミノの評価は中・高校生とも高かった。

性差では交歓会に対する評価が、男子よりも女子で有意に高かった。また雪合戦に対する評価が、女子よりも男子で優位

表 4-2a 個別プログラムの評価 (性差)

	男子	女子	性差
	(N=26)	(N=22)	
	Mean (SD)	Mean (SD)	
a. 交歓会	2.04 (0.66)	2.55 (0.51)	F(1, 44)=5.51*
b. 国際交流	2.23 (0.76)	2.59 (0.67)	
c. 雪合戦	2.62 (0.64)	1.86 (0.71)	F(1, 44)=10.37**
d. 討論会	2.23 (0.76)	2.27 (0.77)	
e. ドミノ	2.65 (0.49)	2.68 (0.57)	

注: *p<.10 **p<.01

表 4-2b 個別プログラムの評価 (多重比較:男子)

	Mean	b. d. c. e.
a. 交歓会	2.04	= = = <
b. 国際交流	2.23	= = <
d. 討論会	2.23	= <
c. 雪合戦	2.62	=
e. ドミノ	2.65	

注: 不等号は上端の記号で示す項が左端の項より有意に大であることを示す (Mse=0.371, p<.05).

表 4-2c 個別プログラムの評価 (多重比較:女子)

	Mean	d. a. b. e.
c. 雪合戦	1.86	< < < <
d. 討論会	2.27	= = =
a. 交歓会	2.55	= =
b. 国際交流	2.59	=
e. ドミノ	2.68	

注: 不等号は上端の記号で示す項が左端の項より有意に大であることを示す (Mse=0.371, p<.05).

に高かった。多重比較の結果でも男子は交歓会を5個の個別プログラムの中で相対的に低く評価し、女子は雪合戦を低く評価した。ドミノの評価は男女とも高かった。

4. 考察

今回、自己概念調査票で、事前・事後の差が有意、または有意傾向である項目数は、中学生で17項目中10項目、高校

生で同じく5項目であった。17項目の調査票を用いた調査結果は、現在のところ本調査以外には、1999年10月キャンプに関するもののみである。これは先に述べたように、18名の不登校児童・生徒が参加した長期宿泊型冒険教育プログラムの結果で、17項目中11項目で有意差、または有意傾向が見られた。

29項目の調査票を用いた頃までさかのぼって結果を列挙すると、耐寒テント泊などを内容として2泊3日の日程で行われた1997年冬季宿泊研修で、中学生17名・高校生4名が参加し、5項目が変化し、氷雪上のトレッキング・耐寒テント泊などを内容として、2泊3日の日程で行われた1998年冬季宿泊研修で、中学生25名・高校生5名が参加し、5項目が変化し、市街地トレッキング・カヌーイング・アイスクリーム作りなどを内容として、1泊2日の日程で行われた1998年夏季宿泊研修で、中学生101名が参加し、4項目が変化し、山岳トレッキングなどを内容として、2泊3日の日程で行われた1998年適応指導宿泊研修で、不登校中学生25名が参加し、5項目が変化し、登山・カヌーイング・乗馬などを内容として、6泊7日の日程で行われた1998年適応指導宿泊研修で、不登校中学生19名が参加し、9項目が変化し、氷雪上のトレッキングなどを内容として、3泊4日の日程で行われた1999年適応指導宿泊研修で、不登校中学生10名が参加し、4項目が変化した⁽⁵⁾。

屋内活動を主とした短期宿泊型の今回のプログラムは、これまでに最も多くの変化が見られた不登校中学生を対象とする長期宿泊型冒険プログラムに匹敵する効果をもたらしている。

今回のプログラムで注目されるのは、活動の単位である班を、班員の出身地域が全て異なるように意図的に構成した点、および個別プログラムの多くが、班員相互の緊密な協力を必要とする小集団・集団活動を内容としていた点である。参加者は見知らぬ他者と共同で個別プログラムの課題を次々に達成していかなければならなかった。それぞれは課題の与える負荷とは別に、他者との共同ということ自体から発する精神的な負荷を含み、日程の進行とともに見知らぬ他者が仲間へと変わるにつれて、それは緩やかな開放に向かっていったはずである。

個別プログラムの中の交歓会は、発表内容の組み立てという知的な精神的負荷を含みながらも、小集団を単位としたアイスブレイクという位置づけが可能であろう。国際交流には、ゲームやスポーツというアミューズメントの要素だけでなく、異文化、ないし外国人との接触による緊張という情動的な精神的負荷があったと思われる。雪合戦は厳格なルールにしたがった集団競技であり、勝敗にかかわる情動的な精神的負荷と動的な身体的負荷を含んでいた。討論会は勝敗にかかわる情動的な精神的負荷、弁論の組み立てに必要な知的な精神的負荷の2つを含み、ドミノは持続する静的な身体的負荷と、牌が倒

れる過程での短くはあるがおそらくは強い情動的な精神的負荷を含んでいた。ドミノの牌が全てが倒れた瞬間は、個別プログラムの課題が達成されると同時に、全てのプログラムが終了し、個人・小集団・集団の緊張が一挙に開放されて、それぞれが相互に一体化した瞬間でもあった。

中・高校生ともに確認された、他者とかかわる自己概念の肯定的な変化は、見知らぬ他者とのこうした共同の活動を通じて実現した。

中・高校生のいずれにおいてもドミノに対する評価が高かったが、これは単一の個別プログラムに対する評価というだけでなく、プログラムの終結部分にあるドミノの評価を通じて、プログラム全体の評価が表現されていたということが言えるのではないだろうか。交歓会、討論会の評価が高校生で高く、中学生で低かった。こもことは、自己概念の変化が、高校生では静的な側面で強く、中学生では動的な側面で強いという印象と関係することであるかもしれない。

短期宿泊型の室内活動を中心としたプログラムでも、自己概念の顕著な変化が確認された。従来、野外教育の場面に限られていた自己概念調査票の適用範囲を広げ、その結果にもとづいた調査票の吟味が今後必要になったと思われる。

文 献

- (1) 梶田 徹一 (1980) : 自己概念の心理学、東京大学出版会、228.
- (2) 諫山 邦子、奥山 洸、加藤 俊之、森 敏隆 (1998) : 釧路市の野外教育プログラムの参加者の自己概念の変容、野外教育研究、2(1):12-23.
- (3) 諫山 邦子、奥山 洸、加藤 俊之、森 敏隆 (1998) : 釧路市の冒険教育プログラムの取り組みと参加者の自己概念の変容、環境教育研究、1(1):97-106.
- (4) 諫山 邦子、奥山 洸、加藤 俊之、森 敏隆 (1999) : 青少年の広域事業としての合同キャンプの評価—冒険、体験、いじめ根絶のための連続キャンプ—、環境教育研究、2(1):9-18.
- (5) 森 敏隆、諫山 邦子、奥山 洸、加藤 俊之 (1999) : 野外体験が自己概念におよぼす効果、釧路論集、31:213-222.
- (6) 飯田 稔、井村 仁、van Dermissen, B. (1986) : 冒険キャンプにおける小中学生の自己概念と不安の変容、筑波大学体育科学系紀要、9:91-101.
- (7) 小玉 功、森 敏隆、菅原 利昭、齊藤 詔司、奥山 洸、諫山 邦子、加藤 俊之 (2000) : キャンプ経験が不登校生徒に与える行動的、心理的効果、環境教育研究、3(1):59-68.

資 料

北空知広域社会教育事業

シニアリーダー研修会

21世紀の北空知を担う中・高校生の集い開催要項

- 1.趣 旨 次代を担う北空知に住む中・高校生が一同に会し、交流を図るとともに、地域において青少年の社会参加や活動の活発化を図る。
また、将来の青年リーダーとして必要な技術の習得、交流をとおして国際交流を学ぶことにより、実践力を高める。
 - 2.主 催 北空知1市6町教育委員会(12年度主管 妹背牛町)(深川市・幌加内町・沼田町・秩父別町・妹背牛町・雨竜町・北竜町)
 - 3.後 援 北海道教育庁空知教育局、北海道立青年の家
 - 4.期 日 平成13年1月10日(水)～12日(金) 2泊3日
 - 5.会 場 北海道青年の家(深川市音江町音江2丁目7番1号)Tel 0164-25-2059
 - 6.参加対象 少年活動シニアリーダーとシニアリーダーを志す中学生・高校生及び北海道少年の船、北海道ジュニアセミナー修了生
 - 7.研修内容 ①各町村交流交換会
②雪合戦
③ドミノ倒し
④国際交流の集い
⑤討論会
 - 8.持 物 (略)
 - 9.申込方法 (略)
 - 10.定 員 70名
 - 11.参加費用 各市町村教育委員会にて負担いたしますので参加者個人は無料です。
-